

JUKU
JOURNAL

塾と学校
中学から大学までを結ぶ
情報誌

隔月誌

2020
MARCH 3
塾ジャーナル

黄色い絨毯のような菜の花

特集Ⅰ

ゲーミフィケーションが広げる
AI教育の可能性

特集Ⅱ

印象に残る塾対象説明会のコツ

**購読申込
受付中!**

お申し込みは挟み込み
ハガキ(切手不要)を
ご利用ください。

英泉塾キャリアデザイン講座「E-Lab」(イーラボ)が3年目に突入 子どもの内に潜む強力なエンジンに火をつける 一人ひとりが幸福な未来を創る力を育成する

有限会社EISEN 英泉塾 代表取締役 安田 卓史 さん



E-Labでは、一人ひとりが能力を自由に発揮できる場を提供し、主体的に行動や未来を選択できる力を養う

創立40周年を迎える英泉塾が2018年から高校生対象に始動した「E-Lab」(イーラボ)。入試や社会で役立つスキルに留まらず、生徒が真に求める人生を突き詰め、実現する行動力と人間力を育成する、英泉塾オリジナルのキャリアデザイン講座だ。実施から2年、今春の大学進学実績には、自らの可能性に目覚め、自分を信じて未来を選び抜いた「実績」が刻まれている。自尊感情を高め、内発的動機を喚起するアクティブラーニング、ワークショップ、哲学対話など多様な手法を駆使して展開するExplore(探究する)-Lab(場所)の現在進行形がここにある。



有限会社EISEN代表取締役 安田 卓史 氏

「自分が求めるもの」を得て 成果を勝ち取る高校生たち

「将来について考える機会をE-Labから得て、今まで意識できなかった『自分自身』が浮かび上がってきた」と異口同音に語られる高校生たちの変容を、我がことのように喜ぶのが、E-Lab発案者であり企画・運営を担う須藤杏奈先生だ。東大卒・英泉塾のOGでもある。

「高校時代の私は大学に行く理由を考えたり、『夢がない』ことに悩んだりすることすらなくて。それで結局、大学に入ってから『もつと将来を考えておけばよかった』と悩むことになるんです。E-Labでは、高校生たちが将来の夢を明確にしたり、『自分自身がこんなことができるんだ』と可能性に気づいたり、難しいと思っていた大学に合格したり、さらに勉強する意欲が高まった、と語ってくれた子もいます」

高等部大学受験科には都心はじめ群馬・茨城・千葉から通う生徒もいる。そのほとんどは推薦入試・AO入試の手厚い対策だが、須藤先生はE-Labの可能性はそこに留まらないという。

「以前はエントリーシートを書く子、面接がある子だけ対策をしていましたが、E-Labは全員に



高等部大学受験科副校長 「E-Lab」プロジェクトリーダー 須藤 杏奈 氏

対応できるんです。一般入試の子に対しても『将来何をしたいの?』と一人ひとりに向き合い、引き出していく機会が生まれています」

何を望んでいるのか、どうすればいいのか、という答えは「当人たちを持っている」と語るのは英泉塾代表・安田卓史先生。

「大人からの期待や就職率などで大学を選ぶのではなく、本当に何がやりたいのか見つけて自分で選んで、それを勝ち取る——要は『信念』です。よね。受かる見込みのなかった大学に合格していくのは、彼らの心の中に潜む強力なエンジンが着火したということ。生徒たちはE-Labで『信念』を掴み取ることができるんです」

いまの自分を語ることで 未来の自分が見えてくる

E-Labは3つの領域から構成されており、社会や時代を捉えたテーマ設定、効果的な手法で多くの授業にもE-Labのプログラムを取り入れています。40年前から英泉塾が目指してきた「全人教育」は、アクティブラーニングやグループワーク、哲学対話といった教科学習以外の「手段」を新たに得て、より先鋭化してきたと言えるでしょう」

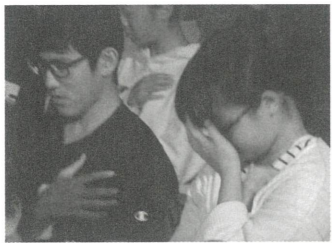
すでに安田先生自ら講師となり「E-Lab」の名称で地元企業の社員研修を実施しており、他塾からもコンテンツのオーダーがきているという。現在、教材とノウハウのパッケージ化が急務とのこと。昨年からE-Labの企画運営に大学生講師のインターン集団も加わった。「こちらも彼らの成長に貢献できれば良いな」と思い、声をかけたら7人ほどがすぐに手を挙げたという。「学生たちの能力が期待以上に高く感動します」と須藤先生。彼らが情熱を傾けて生徒の成長に貢献するのはなぜだろう。安田先生はこう語る。

「世の中の良いインパクトをどれほど与えたか」って自己重要感にダイレクトにつながるんです。この強力な自己肯定感があれば、どの道に進んでも活躍できる人材になれる。E-Labは、関わる人みんなが学び、可能性を見出して成長できる場所——Explore(探究する)-Lab(場所)のコンセプトそのものになりつつあります」

英泉塾そのものが 探求する場所(E-Lab)へ

「一人ひとりの心のうちに潜む強力なエンジンに火をつける」E-Lab最大のミッションを濃縮させたのが「夏合宿E-Lab特別編」だ。昨夏は中学生もグループディスカッション「正解のない問い」に挑戦。少子化や多様性を包括した社会で、何が問題になり得るのか、またその解決にどんな力が必要かを皆で考えた。安田先生はその場の熱気に興奮した一人だ。

「中1・2がレベルの高い、すごい議論をするんですよ。そのあと生徒の学習の仕方や行動選択が、より前向きな方向へと変わっている。今では、小・中学生の国語



行動選択の根拠は「手に入れた未来」から自ら逆算する



① 大学・学問(大学生進路講演、アクティブラーニング、探究学習)
② 社会・仕事(グループディスカッション、社会人基礎力養成、社会人講演)
③ 人生・自己(自己分析ワーク、哲学対話)

2017年から毎年行う講座「学問の魅力を知ろう」では、大学生講師が専攻する学問を高校生にわかりやすく紹介する。2018年のグループディスカッションのテーマは「オリンピックに4つ目のメダルをつくるとしたら?」。高校生と中学生が5W1Hを使い質問をつくって議論を展開、問い立てによって議論の質が決まることを実感した。

2019年12月に行った高2対象「自分の研究テーマを考える」で

は、インタビュ形式のペアワークからE-Labのメインテーマ「主体的なキャリア選択」への発展を目指す、と須藤先生。

「生徒が互いに同じ質問をし合っている、いまの自分が興味のアテナを何に張っているのか、問題意識などを引き出していきます。『現在』だけでなく『過去』や『未来』に関する質問、『自分』だけでなく『他者』『社会』とテーマを広げていくなかで、相手の考えを聴き、自らも語ることで、いろんなことに気づかされるようですよ」

自他ともに「まさかそこに興味があるとは思わなかった」という展開が続く、ある女子生徒は「特別ハマっているものがなく、物事に對して関心が薄い」と自己分析していたが、都市環境問題に興味を持つ自分に気づき、志望大学を決めたという。このあと「探求学習」として自分のテーマを深めていく。予測不能な社会で「夢が持てない」と苦しむ高校生は多い、と安田先生は自らの過去を振り返り共感を寄せる。

「与えられたテーマだと問題意識をもって深めるのは難しい。でも自分のテーマって当事者意識のカタマリですからね。無理して夢を探すよりも『いま本気でやりたいこと』を全力でやれば、絶対に未来は見えてきます」